



調子の悪

いとぎ

川崎ゆきお

「調子の悪いときの回復方法はありませんか」

「そんな、調子のいい話はないのですが、これは何とかあります」

「それで調子が戻りますか」

「はい」

「どんな方法ですか」

「その前に、色々と説明が必要なのですが」

「それを飛ばして先に解を下さい」

「はい。その解とは、調子の良いことをするのです」

「はあ。だから、調子が悪いので、それは難しいです。それに解答にはなっていませんが」

「だから、能書きがあるのに、あなた、解を先にくれと言うからですよ」

「じゃ、聞きます」

「簡単なことです。調子の良いことをするのです」

「だから、それは先に聞きました。何処が能書きですか、説明ですか」

「今、調子が悪いのでしょ」

「体調も悪くなってきました」

「今といっても、その今はどういう今です」

「ああ、それが能書きですか」

「その手前です」

「仕事が上手く行きません。壁にぶち当たりました。これは面倒なことになり、にっちもさっちもいきません。解決方法が見付かりません。そのため、目先真っ暗で」

「はい」

「はいじゃないです。どうすればいいのですか」

「個々のことは知りません。あなたの仕事内容や、何が壁なのかの詳細は聞く必要はありません」

「聞かないで、解が得られるのですか」

「だから調子の良いことをしなさいとさっきも言ったでしょ」

「調子が悪いのに、調子の良いことなどできるわけないじゃありませんか」

「そうじゃありません」

「ほう」

「調子が出そうなことをやりなさい」

「はあ」

「だから、調子が良くなることがあるでしょ」

「調子ですか」

「調子の悪いときは、良い調子の調子に戻ることです。つまり仕事の調子は悪いけど、他のことで、調子よく進んでいることがあるでしょ」

「ありますよ。最近趣味で始めたハイキング、これが調子が良いです」

「最近行ってますか。そのハイキング」

「調子が悪いので、行く気力もありませんよ」

「しかし、行けば調子が良くなるでしょ」

「だから、それはハイキングの話であって、仕事の話ではありません。ハイキングから戻ってくれば、仕事の調子も良くなるなんてことはないはずですよ。解決策にならない」

「調子の悪いことを、調子の悪い状態でやるより、山に行って調子が良くなった状態で、調子の悪いことをするのがいいのです」

「ハイキングと仕事とは関係ありません」

「しかし、調子が良くなるのでしょ」

「ハイキングへ行くとね」

「じゃ、その良い状態の調子、その調子で悪い調子の仕事をすればいいのです」

「何が、良いのですかね」

「まあ、単純な話です」

「要は気分転換ですか」

「そうです」

「しかし、そんな気分になれない。調子の悪いときは」

「そこは目を瞑って出掛けてみなさい。努力するとすれば、そこだけです。行けばいいのです。家を出れば」

「そうですか。行ってもいいんだけど、気がかりで」

「先ずは出ることです。ここだけは作為的ですがね」

「いつもは仕事が一段落したときの楽しみで出掛けていました」

「仕事で壁にぶつかった。それも一段落でしょ」

「あ、なるほど」

「まあ、欺されたと思って出掛けなさい」

「はい、欺されてみます」

